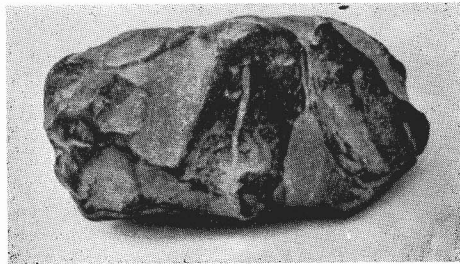




礫 部 落 の 礫 宮



礫 宮 の 御 神 体 の 石

古く、河原を開墾して住みついた村の伝承としては、むしろ自然で、なつかしい縁起のようと思われる。

神社の合併があつて小出の富士権現に相殿になったことが貞享二年の書上げにみえるが恐らくこの村の発祥に縁起のある御神体はお移ししないで村人が祭りつづけて、現在の御神体は、古くからのものと思われる。

付 寛文五年書上げより

礫 宮 村

一、若松の西北行程七里にあり、南北五十間、東西三十五間、当邑の謂れ伝て云う、昔磐梯大明神此処へ礫を投玉う。其石を鎮守として磐梯大明神と崇む□、石其形ち円也、村より東南二町十四間に有、石に依て村を礫の宮と名く、家居乱住す。村の建始の年月不詳。

一、家五軒、竈六、男二十一人、女十五人、馬六疋年々増減あり。

一、田三町二反一畝二十六歩、内三反五畝土色黒真土、七反七畝白して砂交、二町一反土色赤して砂交、土色並して赤く、但一分黒二分白七分赤、三反上の下、七反五畝中の下、二町一反六畝二十六歩下の下、土の位並して下の上。

一、島一町五反四畝十九歩、内三反土色黒真土、五反土色白真土、七反四畝十九歩土色白くて砂交、土色並して白し、但二分黒八分白、三反上の下、四反中の中、八反四畝十九歩下の下、土の位並して中の下。